

# 禪が伝えたお茶の話



画：正親里紗

## 第10回 鎌倉時代の禅林とお茶の話（上）

館 隆 志

鎌倉時代、多くの僧侶が海を越え、中国の地に到り、禅に参じました。その中で、一部の僧侶が中国僧から印可（悟りを開いた証明）を受け、禅の法脈を受け嗣いで帰国し、その後、日本において禅を弘めました。荣西禅師は天台山万年寺、天童山景德寺で臨済宗の虚庵懐敏に参じて印可を受けました。また、帰国後に天童山の千仏閣という建物のための資材を送るなどして、伽藍復興にも尽力しました。荣西禅師の後、多くの日本僧が中国への留学を目指しますが、その滞在先の多くは天童山で、荣西禅師によって参学ルートが作られたのでした。

荣西禅師に参じた道元禅師は、建仁寺僧として入宋していますので、やはり天童山に行っています。その後、諸山を歴遊し、正師（本物の指導者）を求めて行脚し、最終的に天童山で曹洞宗の如浄禅師に参じてその法を嗣いでいます。また、この他にも円爾禅師が入宋し、径山で臨済宗の無準師範に参じてその法を嗣いでいます。円爾禅師以降は径山への参

学ルートが開かれています。円爾禪師は東福寺の開山です。

道元禪師、円爾禪師とともに、日本に宋朝式の修行生活を導入しようとし、伽藍建築も修行生活も宋朝式を取り入れました。そして、それと同時に中国の文化も導入しましたが、その代表的なものが宋朝式の喫茶文化です。中国で日常生活の一つとして禅林の修行生活に取り入れられた喫茶文化は、日本では、禅林の修行生活の一つというだけではなく、最新の宋朝文化でもあったのです。その目新しさは、多くの人を惹きつけたことでしょう。

南宋の禅林に留学する日本僧が多くなつてくると、日本に興味を持つ中国禅僧が現れるようになり、その代表的な人が、後に鎌倉建長寺の開山となる蘭溪道隆禪師です。印可を受けた後も修行を続ける中で、留学中の日本僧と知り合うようになり、日本でまだ禅が弘まっていなことを聞いて、自らの意志で、日本に行って禅を弘めようとしたのです。そして、蘭溪禪師の後、多くの中国僧が日本に

やってきました。

日本にやってきた中国僧は、みな、南宋禅林を日本に再現しようと勤めました。そして、その中には当然、宋朝式の喫茶文化が含まれていました。日本の禅林は、当初は中国に留学した日本僧と、中国からやってきた渡来僧が中心となりました。間違いなく、宋朝式の喫茶文化が行われていたのです。

蘭溪禪師の記した『弁道清規』は、日本の臨濟宗における現存する最も古い清規と考えられますが、この『弁道清規』には、朝の粥と昼のご飯の後、それぞれ茶を飲むことが記されています。この点、道元禪師の清規にも、皆で茶を飲むことが記されています。鎌倉時代の禅寺では、お茶は毎日飲むものだったのです。

道元禪師の永平寺の修行者の数はわからないのですが、史料から推定した上で、当時はおそらくは修行僧は三十人ほどだったのではないかと私は考えています。ちなみに、私が修行していた一九九九年から二〇〇二年頃には

二百二十人もの修行僧がいました。一方、蘭溪禪師の建長寺は、この時代で二百人以上の修行僧がいたようです。二百人の修行僧が毎日二回もお茶を飲むというからには、大変膨大な茶葉が必要だったはずで、ひよっとすると、鎌倉中期には、すでに膨大な量の茶が生産されていたのかもしれない。

ちなみに、中国の禪寺ではどうしていたかと言うと、やはり膨大な量の茶葉が必要とさされてきました。そして、その茶葉は水車を回して抹茶にしていたことが、図像史料から知られています。ただし、中国の禪寺は、当時の建長寺の何倍もの修行僧がおりましたので、必要な茶葉もその数倍ということになるでしょう。いずれにしても、禪の修行には、膨大な量の茶葉が必要だったことがわかりますね。

お茶の異名を「茗<sup>かい</sup>」と言いますが、これは上等な茶のことを指しています。鎌倉時代の禅僧の記録を見ていきますと、幾つかの史料に「茗」が見られます。たとえば、蘭溪禪師か

ら円爾禪師への返書には「茗」とあり、「茗」が贈られていることがわかります。このように、贈答品として贈られる場合は「茗」と記されています。また、特別な行事などに用いる茶の場合も、やはり「茗」と記されています。先般紹介した、菖蒲茶、茱萸茶、菊花茶などの場合も「茗」を用いていたようです。一方、普段の茶は「麩茶」（粗茶）だったようです。この「麩茶」というのは謙遜表現のようにも思えるのですが、「アラクキ茶」と注記している鎌倉時代の史料がありますので、実際に「麩茶」（粗茶）だったのではないのでしょうか。このように、鎌倉時代の禅林では、日常で用いる茶と、贈答品や特別の行事に用いる茶は、区別されていたと考えられるのです。

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。駒澤大学専任講師、花園大学国際禅学研究所客員研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭溪道隆禪師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。